

資料

本案内

2017年 暮らしと協同の研究所 第25回 総会記念シンポジウムのご案内

第一次案内より一部変更あります

- ◆ **日程** **6月24日(土)** 13:00～17:30 シンポジウム
 17:45～ 第25回総会
 18:45～ 懇親会 (パレスサイドホテル)
- 6月25日(日)** 9:30～12:30 分科会
- ◆ **会場** 同志社大学今出川キャンパス 良心館 ※会場が昨年と異なりますのでご注意ください
- ◆ **申込締切り** 6月12日(月)

生協労働のあり方が、いま注目されている。

(開催趣旨)

生協労働のあり方が、いま注目されている。その背景のひとつには、生協の現場における深刻な人手不足の問題がある。「正規職員・パート職員」のみならず、アルバイト、嘱託、限定職、ワーカーズ、有償ボランティア、派遣、委託等々さまざまな雇用・労働形態を採用し、「個配」を主力業態として成長してきた生協であるが、いまやそれでも必要な労働力を確保できないとして、留学生や外国人研修生の採用をも視野に入れる生協が出てきたのである。

もうひとつの背景は、これまでの「日本人の働き方」への懐疑と「新しい働き方」の探求を日本社会がこれまで以上に抱き、模索し始めたことである。労働側のみならず政府においても、少なくとも建て前としては「同一労働同一賃金」が語られている。多様な労働形態を率先して開発してきた生協は、それにどう応えようとしているのか。

さらに近年、共済組合や農業協同組合のような非営利・協同の組織・運動が政府の露骨な規制・干渉・攻撃を受けており、その対抗策としても「協同組合らしい労働のあり方」を示し、実行することが求められているという事情もある。

本シンポジウムは、このような状況を受けて、協同組合の実践家と研究者が「新たな生協労働像」を描くための第一歩として企画したものである。

(生協労働研究会代表 杉本貴志)

主催：暮らしと協同の研究所

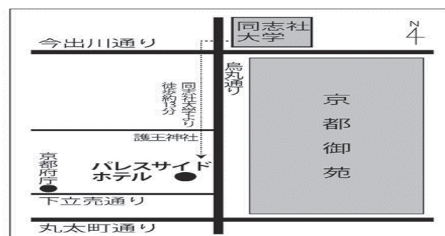
〒604-0857 京都市中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町 258 コープ御所南ビル 4F
 TEL:075-256-3335 FAX:075-211-5037
 E-mail: kki@ma1.seikyoku.ne.jp (1 は数字)

6月24日(土) 13:00~17:30 シンポジウム：良心館 1F RY104号教室

- 13:00 開会挨拶
13:05 解題「生協における職員・労働者一歴史と現状、研究会の課題」
杉本 貴志(関西大学教授)
13:35 報告
Ⅰ 「70歳までの定年延長と同一労働同一賃金」
島崎 安史(エフコープ生活協同組合常勤理事)
Ⅱ 「職能給導入とその後の変容」
山縣 宏寿(諏訪東京理科大学講師)
Ⅲ 「協同組合としての理念教育をいかに進めるか」
西井 賢悟(一般社団法人JOC総研主任研究員)
15:35 休憩・設営
15:45 研究者コメント
Ⅰ 木本 喜美子(一橋大学名誉教授)
Ⅱ 加賀美 太記(就実大学講師)
Ⅲ 青木 美沙(奈良女子大学助教)
16:30 パネルディスカッション
コーディネーター：杉本貴志
パネリスト：島崎安史・山縣宏寿・西井賢悟・木本喜美子・加賀美太記・青木美紗
17:20 まとめ 杉本貴志
17:30 終了

17:45~18:30 第25回総会

18:45~20:00 懇親会 (パレスサイドホテル)



6月25日(日) 9:30~12:30 分科会 良心館 4F

第1分科会 「今、考える『協同組合』の価値～若手の目に映る『協同』から」

(趣旨)

2016年11月、ユネスコの世界無形文化遺産に「協同組合において共通の利益を形にするという思想と実践」が登録されました。「協同組合の思想と実践」が未来世代へ繋ぐべき存在として評価された一方で、日本において社会問題の解決を志す人々がその方法として株式会社を選び、非営利組織や協同組合を選ぶことが少なくなってきたのでは、という指摘があります。研究面においても、協同組合を真正面に据えた理論的な研究は少なくなっていますし、残念ながら、協同組合に関心を払う研究者は決して多いわけではありません。しかし、「協同組合の思想と実践」が注目された今だからこそ、改めて協同組合や協同の価値を考えてみる必要があるのではないのでしょうか。とくに、それらを引き継ぐ若い世代の目に、協同や協同組合はどのように映っているのでしょうか。研究者と参加者との意見交流で協同組合と協同の魅力を考えます。

- | | |
|----------|-----------------|
| コーディネーター | 片上 敏喜(日本大学助教) |
| 報告Ⅰ | 加賀美 太記(就実大学講師) |
| 報告Ⅱ | 青木 美紗(奈良女子大学助教) |
| 報告Ⅲ | 則藤 孝志(福島大学准教授) |
| 総括コメント | 北川 太一(福井県立大学教授) |

第2分科会「協同組合による地域づくりへの道-産直・地産地消から福祉まで-」

(趣旨)

2016年2月26日、龍谷大学で開催された第32回全国産直研究交流集会では、TPP協定のみならず、グローバリズム、効率化一辺倒で突き進む格差社会におけるさらなる格差の拡大、荒ぶる資本主義経済に協同組合がこれにどう対峙し、どのような改良・改善を獲得するのか。協同組合の産直、地産地消はどのような対応を求められているのかが議論されました。ここから一步、歩を進めるために、「食と農、地域とくらしを守る」という私たちのささやかで、そしてまっとうな願いを実現するために、私たちはどのような実現プログラムをもつべきなのでしょう。産直、地産地消そしてそれにつながる「地域づくり」がそういうものであってほしい。荒ぶるハイパーグローバリズムに抗うものは何か。地域づくりの身近なところでつながっていく、そんな取り組みの積み重ねの何かを生み出す力がきっとその源になるのでしょうか、ともに学びましょうね。

コーディネーター 辻村 英之（京都大学農学部准教授）

コーディネーター 小池 恒男（滋賀県立大学名誉教授）

報告者Ⅰ 「無茶々園40年の活動と21世紀型運命共同体づくり-大地と共に心を耕せ-」

大津 清次（株）地域法人無茶茶園代表取締役

報告者Ⅱ 「京都生協の地産地消事業と産地支援」

福永 晋介（京都生活協同組合）

第3分科会「生協職員の働き方を考える～医療福祉生協職員調査から何がみえたか～」

(趣旨)

超高齢社会の今、医療福祉生協はもとより福祉事業に携わる市民生協にも大きな期待が広がっています。一方、職員の意識や働き方では、少なくない単協が課題を抱えているのではないのでしょうか。職員の働き方は、生協の事業と運動の成否を握っています。当分科会では、姫路医療生協、ヘルスコープおおさが行った職員調査の結果を素材に、理念と実態、人材育成と確保、組合員活動など、職員のモチベーションや働き方に焦点をあてて議論いたします。両生協には、「調査から何を心得て、どのように課題を整理し・問題解決に向かうのか」などのご報告を頂き、さらに研究者からはマネジメント課題や職員調査の意味について問題提起を受け、皆さんとともに議論を深めます。協同組合らしい働き方とは、これからの生協の在り方とは…、必ずや前向きなヒントが得られることと思います。

コーディネーター 川口 啓子（大阪健康福祉短期大学教授）

報告Ⅰ 「組織停滞期にある医療福祉生協のマネジメント課題～職員調査結果から見えるもの」

中村 圭二郎（ヘルスコープおおさか執行役員・診療所統括事務長）

報告Ⅱ 「理念経営と人材確保・育成の実践～職員意識調査をふまえて～」

黒岩 勝博（姫路医療生協専務理事）

報告Ⅲ 「医療福祉生協の職員調査から見えてきたこと」

二場 邦彦（立命館大学名誉教授）

報告Ⅳ 「職員調査の意味と課題」

内藤 三義（佛教大学教授）